



生後数日経つと、牛房から外に出たがる元気な子牛も。



子牛は生後7日齢まで母乳を飲みながら、母牛と一緒に過ごす。



生後間もない子牛は、分娩舎の牛房の隅に設置された専用の小屋で過ごす。

合計1000頭を飼育しています。「JA鹿児島きもつきTMRセンター」から供給される完全混合飼料（TMR※）により、ここでは繁殖雌牛の飼養管理と、おおむね9日齢までの子牛の哺育育成を行っています」と語るのは、鹿屋農場の場長・肥後愛貴さん。

発情や分娩の管理にIoTを導入

母牛の妊娠期間は約285日。1年に1頭の子牛を産むことができます。分娩間隔が延びると、子牛を産ませるまでの母牛の飼養費が余計にかかるため、1カ月で約4万円の損失と言われています。この分娩間隔が、地域内の組合員平均406日に対し、きもつき大地ファームでは平均355日を達成。その背景には、分業化と同時に母牛のIoT管理があります。一つは、母牛の発情をIoTで管理する「牛歩システム」。分娩後約1カ月で母牛の前足に発情行動を感知する器具を装着し、データをパソコンで管理。「朝、農場に来たら、まず発情データをチェックし、どの母牛に種付けするか判断します」と肥後さん。

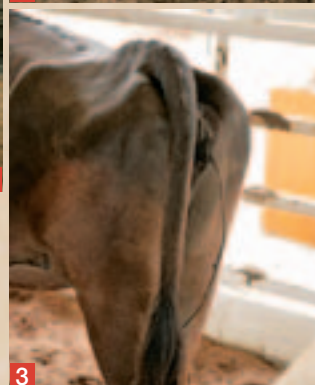
もう一つは、繁殖農家にとって最も大変な分娩を管理する「牛温恵」です。分娩予定日1週間前の母牛に牛温恵を装着。分娩前の微妙な体温変化を感知し、「お産が



2



1



3

1 母牛の前足に装着された「牛歩システム」。発情行動を感知し、パソコンへデータが送られる。2 グラフで表示される発情データ。これをもとに種付けを行う。3 分娩予定日1週間前から母牛に「牛温恵」を装着し、分娩を管理。4 JA鹿児島きもつきTMRセンターから供給される飼料。1日6t以上を母牛に給餌する。

和牛

特集1

始まります」「破水しました」などのメールが宿直当番のスマートフォンに入ります。

「お産に立ち会えれば、たとえ逆子などの難産でも獣医を呼ぶなどの対応ができ、事故を未然に防げます。牛温恵のおかげで100%お産に立ち会えています」

こうして、無事に産まれた子牛

は生後7日齢まで母乳を飲みながら母牛とともに過ごし、2日間のミルクやりを経て、鹿児島県経済連哺育・育成センターに移し、育てられます。早期離乳することで、母牛は発情がスムーズに回帰し、次の種付けができる状態に。また、作業効率が高い機械で給餌するぶん、母牛や子牛の観察や衛生管理には細心の注意が払えます。

「昨年は500頭の子牛出産を達成したので、今年は昨年以上の子牛生産と、事故率の低減を目標に頑張っています」



場長の肥後愛貴さん（右端）を含む従業員4人とアルバイト1人で500頭の母牛を飼養している、きもつき大地ファーム鹿屋農場。20～40代という若さも特徴のひとつ。

鹿児島県 Kimotsuki Daichi Farm
きもつき大地ファーム

繁殖

ITを駆使してきめ細やかで安全な繁殖を

繁殖経営の分業化により、年間1,000頭以上の子牛を生産している「きもつき大地ファーム」。その特徴的な取り組みを紹介します。

撮影／原田圭介



子牛を早期離乳させることで、母牛たちはスムーズに種付けできる状態になる。

繁殖牛の飼養のみに集中できる分業体制

繁殖農家の主な仕事は、母牛に子牛を産ませることです。そのためには、母牛用の飼料生産や子牛の育成など多くの労力が必要となります。それらを分業化し、母牛の繁殖管理に集中して取り組むことにより、肉用牛繁殖基盤の強化を図っているのが、きもつき大地ファーム株式会社です。

JA鹿児島きもつきと鹿児島県経済連が一体となり、「大規模繁殖分業方式モデル事業」の一環として平成22年に設立。農場は鹿屋市と南大隅町の2カ所にあり、それぞれ母牛（繁殖雌牛）500頭、

肥育

家族とともに 一頭一頭に愛情を込めて

第44回日本農業賞・個別経営の部大賞(農林水産大臣賞)に輝いた福永牧場。
その輝かしい肥育実績の背景には、牛たちへ注ぐ惜しみない愛情があります。

撮影／原田圭介

宮崎県
Fukunaga Ranch
福永牧場



福永 透さん・美保さん

透さんは1974年生まれ。宮崎県立都城農業高校卒業後、兵庫県の肥育農家での研修を経て、就農。福永牧場を継ぐ。美保さんは1975年生まれ。2000年に透さんと結婚し、就農。



来年の全共へ向け、肥育されている優良牛たち。

全国和牛能力共進会を
父子で連覇

「爺ちゃん、親父、僕と親子3代にわたる。牛飼い。です」と語るのは、株式会社福永牧場の福永透さん。全国和牛能力共進会(全共)去勢肥育牛の部で、父子で2連覇を達成。枝肉(※1)重量と4等級(※2)以上の上物率が全国平均を大きく上回る出荷を続ける優秀な農家です。

福永牧場で肥育している牛は200頭。主に透さんと妻・美保さんの2人で世話をしています。心がけているのは、その牛の性格に合った飼い方をすること。

「子牛市場で購入してきた子牛を肥育するわけですが、一頭一頭ルーツも違えば、それまでの育ち方も違う。それをうちのやり方になじませることから始まります」

まずは、性格をつかみ、その牛が持っている能力を最大限に引き出すのが、牛飼いの仕事だと福永さんは言います。

一頭ずつ触れ、話しかけ
愛情を持って育てる

「体調はどうですか?」「食べましたか?」。朝夕の給餌前後はもちろん、時間さえあれば一頭一頭の牛に話しかけ、目、耳、鼻、行動を注意深く観察。直接触れて体温を確かめます。

「昨日まで機嫌よく餌を食べてたのに、今日は腹を下してるということもある。そういうときはすぐにケアして、夕方までには食べられるようにしてあげないといけない。早め早めのケアが何より大切で、そのためには一頭ずつちゃんと目を配っていないと」

気になることがあれば、すかさず各牛房にある札に書き込み、作業中も夫婦で情報交換に努めています。

塩にかけて育てた牛を地元に出荷するとともに、一部は生体で東京にも出荷しており、宮崎牛の知名度アップや消費拡大に貢献しています。

「食べた人が『おいしかった』と言ってくれることが、いちばんうれしい」

現在は来年の全共に向けて肥育に励む福永さんですが、夢は「中学3年の息子が『牛(の肥育を)やってみたいな』と言ってくれること」。牛たちへの惜しみない愛情は、こうして親子代々受け継がれていくでしょう。

牛に極力ストレスをかけない肥育法も福永牧場の特徴。1頭あたりの飼養面積は9㎡を

確保。敷料はきめが細かく吸水性のいい、ひのきののこくずを使っています。

牛は暑さに弱いいため、暑熱対策として、インバーター付きの換気扇を2牛房に1台の割合で設置、牛舎側面には直射日光を遮る寒冷紗(かんれいし)をかけています。また、お手製の細霧装置を活用し、真夏は日中15分おきに霧を発生させることで牛舎内の温度を下げています。

そうして20カ月間手



周囲を遮るものがない広々とした環境にある、福永牧場の肥育牛舎。

和牛
特集1

第44回
日本農業賞・
個別経営の部
大賞受賞

左／「体調はどうですか?」。時間さえあれば、牛に触れながら話しかける。
右／牛の様子を透さんへ伝える美保さん。夫婦間の情報交換は欠かせない。



約300kgの牛を20カ月かけ、850kg前後まで育て上げる。

